

【長唄 越後獅子(えちごじし)】

打つや太鼓の音もすみわたり 角兵衛 角兵衛と招かれて 居ながら見する石橋の
浮世を渡る風雅もの 歌ふも舞ふもはやすのも (一人旅寝の草枕
おらが女房をほめるぢやないが 飯も炊いたり水仕事 あさよるたびに楽しみを)
ひとり笑みして来りける

越路がた お國名物は様々あれど 田舎なまりに片言まじり 獅子唄になる言の葉を
雁の便りに 届けてほしや

小千谷縮の何処やらが 見え透く国の習ひにや 縁を結べば 兄やさん 兄ぢやないもの
夫(つま)ぢやもの

(来るか来るかと濱へ出て 見ればの ほいの 濱の松風音や まさるさ やつとかけの
ほいまつかとな 好いた水仙 好かれた柳の ほいの 心石竹 気はや紅葉さ やつとかけの
ほいまつかとな 辛苦甚句もおけさ節)

何たら愚痴だえ 牡丹は持たねど 越後の獅子は

己が姿を花と見て 庭に咲いたり咲かせたり そのおけさに異なこと言はれ
ねまりねまらず待ち明かす 御座れ話しませうぞこん小松の蔭で 松の葉の様にこん細やかに

己が姿を花と見て 庭に咲いたり咲かせたり そのおけさに異なこと言はれ
ねまりねまらず待ち明かす 御座れ話しませうぞこん小松の蔭で 松の葉の様にこん細やかに

弾いて唄ふや 獅子の曲

向ひ小山のしちく竹 いたふし揃へてきりを細かに十七が 室の小口に昼寝して
花の盛りを 夢に見て候

見渡せば 見渡せば 西も東も花の顔 何れ賑ふ人の山 人の山

打ち寄する 打ち寄する 女波男波の絶え間なく 逆巻く水の面白や 面面白や

晒す細布手にくるくると さらす細布手にくるくると いざや帰らん 己が住家へ

【清元 玉兎(たまうさぎ)】

実(げ)に樂天が唐歌に (つらねし秋の名にしおう三五夜中新月の)
中に餅つく玉兎 餅じやござらぬ望月の月の影勝 飛び団子 やれもさ うややれ
やれさてな 白と杵とは 女夫(めおと)でござる やれもさやれもさ 夜がな夜一夜
おおやれ ととんが上から月夜にそこだぞ やれこりや よいこの団子ができたぞ
おおやれやれさて あれはさて これはさて どっこいさてな よいと よいと よいと
よいと よいとなとな これはさのよい これはさておき

昔むかし やつがれが 手柄を夕べの添乳にも 婆食た爺やが その敵 討つや
ぽんぽらぼんと腹鼓 狸の近所へ 柴刈りに きやつめも背たら大束を えつちり えつちり
えじ雁股 しやござんなれ こここそと あとから火打ちでかつちかち かつちかち
かつちかち かつちかちのお山といううちに あつつ あつつ そこで火傷のお薬と
唐辛子なんぞでみしらして 今度は猪牙船 合点だ ころえ狸に 土の船 面舵
取り舵ぎつちらこ 浮いた波とよ山谷の小船 こがれ こがれて通わんせ
いや こいちはおもしろ俺様と 洒落る下より ぶくぶくぶくのうのう これはも泣きつ面
よい氣味しやんと敵討ち それで市が栄えた手柄話にのりがきて お月様さえ 嫁入りなさる
やときなさろせ とこせい とこせい 年はおいくつ十三 七つ
(ほんにさあ お若いあの子を産んで やときなさろせ とこせとこせ
誰に抱かせましようぞ お方に抱かしよ)

見てもうまそな品物め しどもなや 風に千種の花兎 風情ありける月見かな

【清元 四季三葉草(しきさんばそう)】

とうとうたらり たらりら たらりあがり ららりとう ところ千代まで 変らぬ色の
みどりたつ春 まつの花 曽我菊の名も翁草 そよやいづくの花の滝 玲々と落ちて水の月
素袍(すおう)の袖も千歳(せんざい)の 梅が香慕とう うぐいすも 初音床しきわが宿の
竹も直なる一節に うつして四季の三葉草
(立舞う姿いと栄(は)えて 桃は初心に柳はませた 風の縫れ(もつれ)に解けかかる
こちや海棠つぼみのままよ うら山吹に若楓 藤色衣 主とても かざす袂の桜狩)
その盃の数よりも

おおさえ おおさえ 喜びありや 喜びありや 幸ひこころに任せたり

千早振る神の昔に あらなくに 卯の花垣根白浪の 渚の砂(いさご) さくさくとして
あしたの花の富貴草 女子ごころは芍薬(しゃくやく)に 思うたばかり姫百合の
まだ葉桜も染めぬのに そりやあんまりな梨の花 気も石竹に軒の妻

(菖蒲も知らず折添へて いつか手生けの床の花)

元の座敷へおもおもと お直り候らえ ようがましや さはらば一枝参らしよう そなたこそ

(君が由縁の色見草 うつろう水に杜若(かきつばた) 池のみぎわに鶴亀の

縁し嬉しき踊り花)

女郎花 宵の約束小萩が許で 尾花招けば糸薄(いとすすき) 通ふ心の百夜草(ももよぐざ)
こちやこちや真実 愛おしらし そうじやいな しほらしや

時雨の紅葉寒菊や 水仙清き枇杷の花 花の吹雪のサラサラさつと 山茶花や
恵みに花の勲しは 千代に八千代の玉椿 眺めつきせぬ花の時 今も栄えて清元の
治まる家とぞ祝しける

【長唄 うしろ面】

一念他生無量業 仏の誓い有難や 浅間(あさま)しや 我ながら
たまたま娑婆(しゃば)に生れ来て 人をいつわる事をのみ 豪き業とする畜生の
いつか流転をのがるべき なまうだ なまうだ 南無阿弥陀 打つや鉦鼓(しょうこ)の殊勝さよ
聞いて仏に成たから 似たかのう 水鏡 うつる姿も恥しや

我は化けたと面影を それぞと悟る犬の声 ぞつと身に染む鳴子風 寒き夜嵐
身にしみじみと 野寺の鐘に憎や枕をおどろさす いやいや いたづらや
里の童が石投子を 手々に擲つ強者 辛氣辛苦の苦がござる

此処は侍乳のな 山中なれば筆にや事欠く硯墨や持たず もしも忘れずなア おたづねあらば
森の木陰に此身を寄せて やがて逢はうというてたもれさ 姿恥かし なつかしや

花の縁の かの間に合をぞ畦道 細道まわれ まわれ くるくる 鳥の羽音に鳴子の繩に
ひらり くるりと腰をしなへて 踊り舞うて いのうよ 我が故郷へ帰らん 谷峰しどろに
くるり くるり 姿みまがふ 草隠れ